集義外書

脱論一

四

地

ロイ3
2760
8-4

早稲田大學圖書館
寄託者 内田文庫
寄託書第一五〇號
7
第 20 號
第 4 冊

集義外書巻七

脱論四

一心友問、貴老ハ政をし給ひ。大簡にして人道の礼儀を立ず。牛馬に同しからんと申者侍り　云礼儀立。人道務りて。易簡なることのあり。是を易簡の善といふ。今の礼儀をいふものハ。多事多物なり。多事多物ハ誠をうしなふく。儀を建〇きり。誠までも絶ては人にあらず。大礼ハ必ず簡なり。同易簡にして大礼立べきことなりや　云武家の士までかれこく。烏帽子ひたゝれ。ちいさ刀の風俗となりなば。今て人なりの更。礼儀の補をも足りて下し。出る所になんば。倹約の法ハ践して行なべし。上はひとの為にる礼衣ハかりにそて下忘ハ身度もあらし。同し物を用べし。今ハ礼衣だに礼ゆへに。

大正十一年九月廿四日　内田銀蔵子氏贈
2760　8-4

小袖あまたきるハ久しきなるのさかしにせむかし礼服とかにも。
こりり装束。色てハ上下多あり。ちいさ刀ひも付って出しか
小刀脇指大中小色てあり。礼服立けし此弊との医りかし。
着を好むよのもあらそふおさいは文立まるゝ故なり。軍陣
よのこちいさ刀を許さしめ付ごとより大刀をさく用り。今り
よる時よりて遠く徐しとさまて人べし。国容軍容ともめてま
くれて治世久しくなりなん　問今のけぬをやとりかなんなり　云い
まさる故なし。質なれは文をかくし此時ハ弊あるも　問も
質ハ何ぞや　云実儀より出たる風俗実儀よりなりて後。
礼儀なくしてハべし。又は物のさんくんあり。故よ大礼を立んと云
小人ハ質を基とし。是時物を本とすべし　問いかんして実
儀の風俗をなすとべきや　云易簡ハ実儀乃質也。泰伯の

呉国にいたる時ハく礼儀を以て。呉国の夷を変ぜんとすとせし
時ハ先づ却て衣冠をぬぎすてゝ。かゝる夷の風俗に從ひ給ひ
者ハ。儀を変じ給ひ。ひたすら是をも人乃と牛馬に同じく思さ
るべきかとし。此時泰伯衣冠をきびしく。礼儀を厳にして
夷を化せんとし給はゞ。人乃眼目を刺し。彼らは中国の人といて
ひの。俗と共にして後。教に仁義を以し。及すに徳を以し給
ひし故に後代に至りて。中国の礼楽を学ぶ。夷のいやしき
風俗絶しぬ。今の礼儀を先とする者ハ。必ず仁義のちかかし。
是と人面獣心と云て。人乃人たる所は。仁義あるを以て也。
礼義ハ仁義の質をかざる文なり。質を先とすべきか。文を先とす
べきかの論のことは是非をくらべ。これ礼を後にすの論へき。夏ハ忠
をたつとひ。商ハ質をたつとひ。周ハ文をたつとぶ。忠あつて後に質あり。

質ありて後に文あり。質といふハ。其時に應ずるを用ゆ
なり。太古ハ忠信あまり有て。文不足。文の不足ハ。人道乃
礼儀不備なり。然ども忠信あるハ人なり。礼義の不足ハ。獣面大
いふんか。故に後世乃文備の時に至りて。太古の風を行へる者
をハ。人面と牛ろに同しくするのそしりあり。中古ハ文ハ忠
信あり。周に礼義ましく人ハ人面といふべし。周の盛世を至極
ふしく。三皇五帝三王の時ハ。同じき所ハ忠信なり。文質ハ時の
宜なり。今の時ハ。又太信を初じ質をそなへて。文と易ふ
ますべき時なり。今の時ハ周の礼義をそなへるものハ。仁義太信
日に旅して。人面獣心となれり。今ハ又太古に御て。獣面人
なるべきのことしなり也　同世ハ太古乃人ハ。獣面人なり。今
乃人ハ。人面獣心なりとぞ。此ハ。太古にハ人の頭に角ありとせて。

牛頭に似たれども心ハ仁義礼智信の徳全く明なり。今の人
ハ。形ハ全く人の体備りされども。心ハ不仁不義不礼不智不
信なる処あるといふことなり。今の時にハ。礼義乃備りし俗
を人面といひ。不備を獣面といふすハ。かつてしく備り云礼
義を弁へざる俗なく。牛馬に同しといふ事列に付て云
たるまでなり。古ハ天地造化の工いまだ始なりし。故に形ハ
そなはらざる所ありて。人に獣の形有るも有き。然ども
内心にハ知仁勇の徳ありしハなり。後世ハ鬼神の工化く
はしくなりて形ハ人体全し。然共後世の風俗くずれて。心乃
知仁勇人欲のためにおほはされしかば。禽獣にもおとる者
故に常に云。太古の人ハ獣面人心なり。中古乃人ハ人面人心
なり。後世の人ハ人面獣心なり。太古中古をとりて論すり

乃前にハおこれり。今ハ世にあまれり。教の行ハれざる也。世の中
ますます物ありて。氣力よわく。財用まづしく。かぎりなく出來ずる處。
偽多し。是を人面獣心と云。此上にハまれに礼義を行ふ者ハ。
こゝろざしハあれども主君に小身なれバ。心ならず實儀をしらで。
て偽大なり。今の世に當て仁政を行ハんと欲する人ハ先
すべからく學校の教を以てし。人々に仁義を知しめんの道。世の
礼多事多物を減して。易簡ならしめ。事少く物儉を
貴ぶ心をすゝめ。實儀を尊ぶことを立べし。然して後人欲の偽
除くべし。是において始て。人心あらたに天性全かるべし。〇
とかさねて後。人乃氣力強し。財用たりなん。氣力生じ財
用たりて。礼義の則なれバ。時ハ文人欲あつまるゝ事のなり。此
時に及て教るに礼楽を以てし。立るに人の道を以てし。定る

に式を以てすべし。志ありといへども皆水土によるべき也　問　何をか
人の道と云。曰衣服文章是なり。烏帽子ひたゝれ。ちい
さ刀ハ日本の形によれる人の道也。總て人の体を立ぬ。人衣
の禽獣に異なる所の文章なり。何をか式と云。曰時處位
によれる礼儀なり。物ハ次第に繁りやすくして。而して至る
あり。事ハ次第に多なりやすくして。乱るゝに至りぬ。故に
式を定て。恭敬の人も過ることあらしめ。不恭の人も及ばざ
ることなからしめ。事簡易なる時ハ知やすし。物簡なる時ハ
なりやすし。文武ハ易簡の道にて不失ものなり。しかるに
るを作為して人に求るにあらず。人の道ハ恭倹の則を
立んためなり。義を通にあらず。故に人の道式ハ治道の要
なり　問　礼楽ハもろもろの法を用べきか　云人の道式も

則礼なり。何事も唐より伝へざる地なし。楽は春夏
秋冬土用の調あり。十二の律呂あり。十二月に配して天
地乃正音なり。今の三京三行三のうち地乃中。いつれも
てもなのより以来に学ぶべし。正楽は宮味。みれいて楽
の合ぬべし。楽は用ひてあくまでなし。甚面白きうちなし。
それは法うちされて去りぬ。礼楽なくては人なほあれば。
治まれあれば長久なるまじ。節は理を知るべし。
何ぞ礼儀をしらずして人道を牛馬に同じくする事を欲
せんや。学んで目前の水土によりて今のみに忘れし。我身の位
をしりて実践をすゝんとことなり。政のことは節
の不明なる。何ぞあれかな書に論ずるに及ばれ。
一　心友問。若し志を得て政をし給はゞ。仏法をいかに退け給ふ

しや　云。儒はまだ不成して。事をなさんは大匠に代
木をけづるがごとし。手を傷つけざる者すくなし。節は不徳何
を政をおこなふべきや。又何の志をもつてといふ事かあらん。君
良なるありて為給はゞ。古今は未曾。人情時変の愚見といひ
且仁政の本を去んので。仁政行はるゝ時は。士は士乃時を得。庶
人は庶人乃時を得。出家は出家の時を得て。各其
所を得べし。何の退くることあるんや。其盛衰は天也。
人の力にて為すべき事にあらず。問。されば此みちにて。盤昌
しける仏者。いかで時を得て。国天下ともに行はるべし。給
らずして除かん。云。仏法の仕法よりなすときは仏法
の時を得るといはるべし。今は仏法を繁昌と悦び給ふ
者は。是婦と申しき凡俗なるべし。仏法乃名を去る家志

もし仏法破滅の時にあたりてハ、やぶられ、釈氏に違ふ人をおいて、今
の仏者をみんと欲するハ、是ハ何者ぞといふべし。又我道を
王者也。王者ハ大道なり。大者ハ大路のごとし。仏法ハこれ乃
小なり。小者ハ其中の小路のごとし。異端の如きハ、川流乃如し。我者
ハ大海のごとし。皆変ずべく辞されし、仏の者をこれにあらずとなす
かわらん。防ぎ退けるハ、同じく小者のまさるなり　同じ文中説
民、浮屠の世まれをし、世の学者、浮屠をもてすべく、陽儒陰仏
とて是をいふにハ、浮屠法性とあらんとする事ハ、あやまり也。人の
みを理りて偽り　云中説民儒仏一致と見るにわ
ら、其浮屠ハ婦人の為也。女ハとりわけ文学されバ、其仏法
のごとく本体をもちて、彼乃言語をもてハ通じがたし。此故に
志かるべく、信ずる所によりて、其仏の言語をもちひんとし、その

志ハねむべし。其云ハ、ある人のいはく、世人乃ぞしに仏刹を也。君子此
日月の蝕のごとくなれバ、非ハ非とし、みな改めざるべからず。則中説ハ
孔孟あり。釈これをかなる事を得ず。釈に仏法を退けべし。儒とに云ハ
彼と与に周公にておられ、ともに世に存すべき浪ハあらんなり。そし
て退くべく、我道をたてゝ仏あらんよりハ、浮屠して彼も其者と儒ま
しまいにあり　同程朱氏退ら将しハ非なるべし　云これ其国乃
時に従わん。今の日本の時勢と昔人乃従ふべくハ退べき
同今仏者乃法をあはれ、儒者仏法にて学あるものハ天下是非
帰とよく成仏するハ、仏法繁昌とすべし。程子も此為ゆへ也
のごとくこれをさけとハ、あまねく其中に入るべしとの事へと
云其時のもようと。今とは各別なり。秦漢より後、聖人之
教乃人倫日用のみをもちゐしと云ども、おほくそうりて。よ

常とせる儒のよれ捨し。深その名理とは。唐をう的源
遠の名理とは。異学にあつまりてのこ。氣質を絶とかは。
多ハ異端に入ぬ。周子程子よりも。名体の神妙と。吾学にそう
入りぬると云た。人倫日用をさかんなるとハ。異なりて見るべし。佛
氏ハ世の戒をさけて。浄を玄妙と説ゆへに。越え易し。其時の
佛者ハ丸ん下あるし廃也。そのよりくるしハ。文国にて。人民多く文
盲なれバ。俗氏の説も。異端の教ハさそれし。さる仁説のこ諸也。今
吾国にてハ。さる仁説ハさる人失ひく。異端よあさ後なる教なる也
禅大宗の。大家教も。後世をうとされ。先儒の名より。早浅
よ成く。教も儒より先よくなりぬ。さ的の人の。よりもそふる儒
なりとなし。周程よりけ方。吾名よ神理を発的と治す也
て。其学高く成ぬ。さ的の人ハ多くハけ名よ越なり。今れ俗者多

とゐへも。陽かに不意く。人を由しかても未深し。吾名よ有徳の
君子出あるく時ハ。俗名も自戒佛を捨て。書かもし。是
拾と時是也。大かと日本ハ地まかり。俗氏と世俗く入つらんは。今
ハ俗氏の名甚ひくしと云た。勢治より退へつらは。後世勢より
ら八佛也へし。又正へつらは。仁也あつく。教もりひんれり。君
子の世よ居ても。時をえさり勢氏識を要す。時よ盛衰さ勢
お強弱あり。大畜の時。初二ハ乾体よ居く剛健なれ大進よ
らん所又ハ陰柔なれも。よく剛陰の陽とさらし。時の勢なり。
君子ハ勢をも知く。強なる時も仁也と不失なるを失く弱
なる時も人の剛と不失く時く失に。人そ為るのこ小人ハ
勢を知く強なる時ハ不仁なり勢と失く。弱なるとむて
は人をへつらへて。年寒して。松柏のあかめもれるなく

こゝろなり。ことにおなじものハ。さて仁義をしりのミにてこれをよくしれ
一國忠として。治国平天下の窮理は及なし。夫国れ國をたつ
剣ハ。民あるを以也。民の民たる事ハ五穀あるをもつて也。五穀のゆ
たかなる事ハ。民力修をもつて。功の成によりてなり也。故に
有徳の君ましますの代ある代ハ日に。飾めて長し。其民さか
ふかいて後多く力餘ある事ハなり。乃るさき世の日ハそらのごとく
録し。しかして民くるしミ。勢ハく力不足なる故也。古今日に足らざる事から
ぬ事なし。民苦よりて民衆ハもちぞ少し上くるしく下乱
るる事なし。録ハ事なし。此故に礼義ハ富足より生し。盗賊は貧
窮より起るもの也。富足ハ寛暇より生し。貧窮ハ日なき故に
力經まり。故に聖人ハ力ハ民乃あるかくしく。國の基なるものを
知給へり。淳後篇に云。王者は四海を以家とし。人ひとり一夫不耕天

下受其飢。一婦不織。天下受其寒といへるも。後世の業ハ國昔
多くして利をとるものおほきが故に。本をすてゝ末に趨き。剥游手のもの多く
なるなり。事を營むるものすくなし。浮食するものの多し。故に京都
及び江城下の町屋。游手に化するて商賈牛馬の類ふへ。おの
づからの商賈日々に富み。武士日々に貧しくなりて。武士の貧
くなるは。百姓にかゝりて國窮せん。百姓くるしまバ游民ますます
多かるべし。今の游手に多くなりゆくにまかせては。人の世をいかゞせん。
古人の云。貧生富。弱生彊。乱生治。危生安と云しハ。人々に志なく。
游手にましてなりとも。寡くとも貧しく。游手にても人
に儒者ハ必弱からず。政をよく用ゐれりのハ必乱すなく安平
をもつて。身倹をなし。窮者ハ必危からず也。君たるものハ本業の務
にいさむべし。もそもそに発し。事行わるの。宜かなる欲に欲するゆ

てらくなる時ハ。功なくして。世界の悪しく。其本をしらく。小微の間ふ
止へし。もそれ世ふ悪人多く。欲さかんなるく。かなすふ困窮と以
もる時ハ。刑罰を厳ふもとし。事更甲斐なかるへし。却く彼か習
とまもるへきなり。其序かまも甚しくハ。功なかるへし。易ふ云。童
牛て梏元吉なり。いふこゝろハ。人の欲ハ。初ふ止むる時ハ易しとな。今此
中の人乃欲すてふ盛なるふるとし。ふ附るゝく成らさしといふ。九
いまた止へきのなあり。凡とるこハ悔しいふ。尤甲斐なしへかるし。剝
乃初ハ下よりもそ。終ふ上ふ至て。かなすし国の剝ハ。民よ
つよ初る。民乃困窮なるハ。これ世の剝なる始也。易ふ云。山附於
地剝上以厚下安宅。是剝を止るなれハなり。君の民ふ附れハ山
乃地ふ附るかとし。地厚けれハ山静かふして安し。訓すくして
うくけれハ山もあさうなくるかな。丈剝ハ君ふ退き。小人をの

従かり小人をもちむ時ハ。日々に驕奢也。此故ふ世中衰ふ時ハ。民下に
剝をうく。甚しきふハ士剝をうく。甚しきふハ公侯剝をうく。甚なる時
ハ天下に災害多して。終ふ君も剝をうるふ至て。乱世となる始
なり。今の武士民ふ施すく。ならすをねく。民のつまる成をそして。
民乃剝をうるふて。次よハ已か身ふ及ふすと不知。民の剝ハ世界
此衰ふよりて起るされし。公侯大丈士の剝ハ。国家を君よを初く。
武士かるもんなりきうくつまる也。されハ運氣衰し。天命
あらたまるの時なり。これ君の剝なり。君の天命ありて。世を失
ぬハ名剝也。悪逆なくして失ふ者あり。甚き表ハ山ふあらくなる。
山ハ地ふ有く身へゐるれ土の也。君の象なり。山の本ハ地ふつき
て。古今の川共ふ落なハ。上なる人乃富貴を失ひて下に於く
よるかことし。中夏ふても渭洛つきて夏亡といへり。玉をか

しき桂をさくと詩子も御まり。玉をかくせば。米の多く重なる
をり山桂をとせば。葯の言多なる物なり。山のつきさるゆゑ也。
渭洛乃つきさりてハ。水も山も山の草木流さて。神氣うきく。
流る洛りにおそく崩て去り。古なし不去粉を崩して川をうづむ。
故よハ山も川もなく。川源をとりなる也。年後世よとびく。
山乃なるとも又止世故よ此一へハ。後層よ地をとも西の上云大。
名山大澤ハ封して。有名の望ありて。後世の山川と流るさ
られて。天下の色の源と明らかにし。世の長久を稿し。民生を
豊ひ望才を起し。ひとこれてもその仁政をなきる。去
為ふりて水口澤よあつまり。初夏ハ純陽の月。乎乃て。日てらし
て長ほとのり。五月ハ苗代ふれ為さくるさり。是天氣の不
丁地氣合りて氣化乃為なり。六七月ハ天地の氣不交氣

化の為ふくさる佐常とろ。此二月ハ夕立と以雨露を豊ひ草木
をやるひ。夕立れいてるる神氣限あり。山澤氣を通し。雷風
れ助く所事。神異の行術あり。擾列緯列の海多よ封らは
穀熟乃ときれ。水乃夕立ハ神氣不及。擾列ハ淡緯鴻よ起
多夕立を以豊ひ。緯列ハ小豆鴻よる為られ。鄉よ全年
穀十日ハ淡緯小豆鴻より夕立をとらず。此多い是ハ毎歳
日あり。なひく。田地乃為。當他ふれ失ねば。此は以て民為れ
以ても穀十日乃積て。我年万し以るるあし。二鴻きりあし
て神氣うすされば。雷風豊為を起も人きるうかし。山
うれ此理を知く二鴻あり何てをハ緯る擾列乃穀十
年の五穀の生すす万倍といふぬるあし。其上民生も生ず
くなしまとも。悪異よ凉風を好く。民年凉し。病氣以多

へしこれゆへとゞこほりてあしきや。二諸れあまて添
たりえど穀の減少驗し。御て日本国中に山林少なくれ。
その減少あるをもつてかんがへしるべし。余ハ貝賀の志世しに
出頃よりこふしも。山林を第一者あけまし。ハ。知るよへき様にし
岡山乃あまりてうけハ。行当を同し事なり。太。宰相がと寫
とは。六七月比日てりふとも。夕立いとく。御かハ何ぞや。云淵
の神氣生じたる故よ。傳則八夕立ばうれり。宰相曰あり
近し。其上少よつて清く深山多くもあるあり。すく以人
ともごとの山久しく荒々ならざるかく。天氣ありて。淡路島のこと
きハ草木多けまし。神氣ともより。草木多けれバ神
氣とらすし。又今州諸出なく。松山を好めりて。そらや
さしれる所也。松山ハ多くあまりても神氣の生ずけれバ何

つよかし。却て神氣を損ずることあり。松山よハ下草生
ぜず。水のまて出ると。松はかりとる雨露田畠に入て毒と
なれり。松ハ浦浜などにある木也。山ハ雜木よそてなきもの
し。同山を立る事ハ仁政の本なれバ。今此くも急なり
云政なり。云ふ紀しそ其のと行はまし。ゆへよ紀
承そゆりと。只今人民大なる患を入し。君子ハ業を
始め。統をたれて從ふべき事をなし。人の父母たる仁君なり
御さハ大なる得し。おほよく後行はるべし。此外に一日史
書とらん。山理をとめり。穀蔵を絶く事よ出る事あり。
山林も又あるらんか

一 心友問。古むの被附付る溜池ハ。他の害なくして。後くま
て堅固なりとや。待。或ハ川沿をかして。池を損し。或ハ池

乃堤破損ねけるに及ぶ。是は何ぞや　云易云賢人在
下位而無輔是以動而有悔也といへり。此賢人ハ才徳並備
の君子なれども下にあれバ。人皆天性あり。人ゝの気質のかはる
き事あり。何れも賢人乃知あらんや。又山谷の流も
なるは高き所の水よ。水の出来る所ハ下に位する所よ。
川流大水の時乃防ぎも。水あふれの民なりそれハ害ハ在れバ
或ハ池の堤。或ハ川堤をせんとする時。下に位なりける
老人。又ハ才覚ある者於ゐても情と思させて字。又
倚爾と云ふ奥の後し。物のあるべくるまのなる人きやうに
よる時ハ他乃害なくして堅固なり。是以動而有悔也
なきのみならず事に於る他のまさる情を盡さむ。
きうさる時ハかくしる事あはく成りくゆるなり。泥

や国家の政道までもひとしくぞや。故に昔大舜ハ問ことを好み給て。
才知人情ともに下にて流れまでも知れ給ふなりき。後世の人ハ
下問を恥とす。故に賢才ハ斯ふかくれて蘇綱に接りせ
ましまし下の大事多くすたるなり。知謀の出る処ハ三公九卿乃
知恵斗をひろきに御吏まではかの人の事におゐて此故
に政令とて人情よりぞ時変ふまたかひ事もあるまじきにか
かくれなく問題にして色。其人ハあらぬ。人情時変ハ賢知
ありとも又ざるも此世多くの人ハ知らでし。下にかくれさせ大
平人ハ知らず。ひとり其身になるものハ下に居の賢ありて徳ある
此賢者ハ小人のあざける故をもいふべくいつまでも達せよ。
上の命令ハ。下にさえ其のその至ハ時乃権威に恐れて
貴なしといへども。其実ハ後世に知るべし。徳ある事ども

小なる經綸也。これを全からんとするを。求められてこそといふ也
し。聖賢の君ハ。其人を師として下問に恥ず。臣ハ愚なり。
人ハ知あられ。我の知を用ゆ。天下の才とあれて。治平の
功をなせり。其功徳ハすべて賢君聖主の一人の身に帰す。宜
家天下をもちて以てよしとす。是君の徳なり。是たの
功なりといへり。堯舜禹の君たるもしるしてとるなり。当時に任じ。
後世なるなり。賢君良相ハ。知をつくし功をゆづり名跡をさ
くるといへども。今名百歳にあるを。徳化四海に及ぶなり。な
よりも君子ハ。名を求めされども。かくのごとくの大名あり。こ
もしみゝがらのわすまとおんな。陳六ハ云。知陳太君之
宜君 程子云。吏以一人之身臨乎天下之廣若區々自
任豈能周於萬事故自任其知者適足爲不知唯能取

天下之善任天下之聰明則先所不周是不自任其知則
其知大矣帝堯ふる紀まりの功あなる者まきて。百姓
の老人にすゝ人ハ子のこ。其指ハうんでる事もなけれハ。知へき
恒なし 問えうハ何きまり。帝堯よりなるさりして。
老乞と待く。神て出来るものハ何ぞや 云是とゆる
なる人なるし故なり。堯舜の知も物にあまつかれ。先ん
よし人へきるを知く。善なし給ひぬ。堯舜の附にのこる。善
人多生れるにあられ。善をゆるし給ひし故に。善人多かり
しなり。今も善をゆるとへ人あらハ。天下の善人才能あるを
てかへそふたりしまて
一心度問。家中作法あてなりかゝりかし。続る禄に。法度をおかされ。
なる何ましと申人ハ行り。法度ハ大形いかやうなるかよく待

るや　云法度ハ小人乃心を戒め。正人の心根をよわくすると。
きとへし夏の雷雨乃ごとし。正人ハ涼風を好く其悦し。悪
人ハ雷声を聞て恐るゝかごとし。今時の法度ハ。多ハ正人困
窮して小人ハ悦。小人の情ハ法度ありといへども。事を好める
ハ壊思をさゝるゝなり。かゝる事ハいくも。いくたびも縁らぐ人
とらへして刑罰も手ぬるく。小事ハ人を苦しむるすもあまれ
ば。志ある人ハそれまでとてきよらかの事なし。唐に常を
取べく。三日法度といひしく。後にハありとも立ざれ。正人ハこ
れハ。古今人情の替らざれば。さほどかはらねるもとなひ。書
小記し。治世に役人とも。恥しかるねるすとおもれども。法度
ふれてそむくとも事わすれても。度〻御りをいふれとも其兆
ひそかに居るハ。心気屈して病者となりぬ。自然の時

し。神気よわくハ。世に振るふ心もなりて。風俗も異なり
面ゝまで鬱をかくしで死べし。然に今の法度ハ。論するに
小事のミなれハ。正人を亡ハならずとなりければ。大事ならハ
よしといふとも。人情にかなふへきれバ。益なくして損あり。不當
なへるそれつと

一心友同。下輩の侍の家。主君の氣をもちひ。家人といへし。かゝる徒
居待ら親類知音とも。主人乃前を恐れなく。たとへまゝ待るれ。
下輩のくらしのびく。無縁にしては。其志の親。下輩の幼少の
時より他人そのまゝにて縁をはなしす。新思の為となりて
の縁なり。勤まても君に事てハ。かくなる事なくて取りまハ。
氣味わるく待るゝ。不無縁をやめ待るべきか　云是文
義のとりやくわきたり。其後学問し。然ハさりし以前なり。

天性固有し給へる。義心を。生ながらにして立し給ふ人は。甚
不可也。君に事へかくして事なれとハ。かけひなきとせさ
る儀なり。禮儀人情なく。君たるを其つかへハなくて立さす
なり。其家人も君たるをつくらかかれなく成る時ハ。其度も其
ひく。なとつまと給ふとし。則主君への礼義にて。家人の為也。
かくそれハおのれ。是其我なく其をもてさるハ本名に同しと
いへるも。本名ハ云んなき時ハ罪なし。人として其我不忠ハ不儀
なり。不義なる人ハ。君に事ても不忠なるへし。主人の為なら
く。其度の其ひてし給ふ書經をよみ給ふて。親の其を子に
むくゆるハ其をきは忘ても。義理の心なきもの也。必主君
に忠節へし。おのれをもとくれ。其のりき士也と云かく。犬
に感恍し給ふへし。其我まされ此の為につき。おのれと於

てくハり給ひハ。主人の其給ひくよきありけるをきは。主君の恩と
も云へし。主人の仕合よ化附くよく忠功ありたまけ事りおのれか
家名ハ恥すも付く利を求む大きなるものなりとて人の給ひふへし仁
義の人の知る所にして學問の淵源を經を以て今の學者た名を好とい
聖賢を語るを好といふも。義たれ前ある。世俗文盲の中よるを。
儀ある人も多し。故に學者の流そてあるをおのれと世なるさの
ひきたり僧の其學ハ。何をハなりかて之事をといへハ。其學なとし
きこえる也。實ハあらかなるかあり。彼ハ世をとすそ。かくれなり。
男をやめて。摩を。女除を給く經行をとれ。名利のなき。
それより天性の義心をひきたるハ。恥を知て男氣ある僧
多し。それ人はなハよわ降りして其君あり
一。曲友問。國家不益ある。よ云すと云たき。其そ起れ云小其たる

ゆゑに人不用にて出仕しては知べきやうなし。仕るれば
不用に見る時ハ間ある人きらふ事を存知りけるに慈悲の心と云
へども、されぬかよく仕ふべきなり　云当世ハ才知れおもきそ
ひ。その餘にかく苦しみれども、人の云を用ゆべきは信ある。
後世ハその方まことに人第一人なる。かく成る如し。云儒に如何にて
時ん古人にかくのごとし。何事もかく論せしめて、其證據あるを
知らぬならず。今の人後は人に勝る事にて、何か事にかく見ん
あり。死し去人にハかくの如きの人なり。そして其人何にせむ。
人情の去るあり。当世にても志同しく、仕する人ハ心を立ひ志
をもて信とさせし人ハ不用。世の治乱存亡ハ命なり。才覚の
及ばざるあれば、人生は徳あるにハ是病あり。然れ病をもとて、滋
をおこりるにハ久し。元の体をすて、病をおこしなるの

絶し。ゆゑに人の君子とならしも、病をおこす。されば病ありける
時に、流人とならん罪をうけ多病なり。又大乃おこる是
あるを、故に其身を失ふの病なり。用捨ハおろそかなれ
一　恭敬同敬ハ古非に勝ぬ云たり。常に敬をもってする時へ、血氣
つよからで、心をもかへるの本たるにおこさぬやうにし。怯懦を知
らず。云元来より聖人に至るまで其志実学ハ、ぞく怯懦の
工夫にあり。夫敬ハ血氣徳なり。万物皆敬かと身を全くする
事と知らず。敬なき時ハ身を危ふす。故に凡学の及ばざるも
てハ、君子小人ともに敬なり。凡学の不及ぶ事にしても、自欺を
のをも小人といひ、独を慎むものを君子といふ。怯懦ハ敬なる
知れ身を老り、怯懦といふも、人の凡学せざる知るのみ、見る時
ハ恐くさうなるにあり。されば己ひとり知るを怯べれば、恐るゝに

なくしてとゞまる事なし　同性知を性とすとまぎれしさ
とほし。又偏倚なるすをまぬかれざらんや　云心猶知
を性乃志。天を知て立たる立所ハ。常ハなかしとい
ふ。事よ当てハ必性を生じ　同性知よ志てかくしとと
とり西を行ひ。非さとる事を去らくハ。なんかし　則敷也。
事く志さりよやうにハ。神との老いりし及ぶるべきや。たとへ
んあとけいこも伝へてし。神ありたまし西と一度よひて
ハ。たかれしれ去りくれて。いかなるあさらん。故よよく静るものハ。
天性のまゝハりなくして。かつての事ハ去りなんよ。ひとへく
たがはをハ。学を修して射手よあらわね。仏術もかくのごとくに
とありや。云去り。去れて生成の性知れ。覚るべし　非と
と云ふし人家の知る。真知の識よわしさりすまるらん。格法

経術するし伊なかるべし　程子ハ敬より入。伯夷ハ清より入。柳下
恵ハ和より入る。和ハ不恭なく敬なしがたきをしる。柳下恵の賢さ
伝するハ一なり。賢人の賢なる処ハ。凡情をよく去て。同じき事なり
まざなり。柳下恵ハ不恭なれで。敬なきにあらずくなれども。仏学
をはくまなひのようし後なきを知ハ。後の格法敬学の人乃及へ
きにあらず。仁義礼を知識するべきことハ同じ
一心の友同。いかなれバ篤恭にして天下平かなるや　云是盛徳
の至とのえり。黄帝堯舜衣裳をたれて天下治る。衣裳を
たれくいかで治るべきや衣裳をたれく治る故なり篤恭にし
て天下平かなる故ハ仁なり。仁者ハ天地我心中にあり。万物己
よ備はり。故よ幽明死生へだてなし。富貴貧賤好悪なし。
安楽患難なくひて行ひ。至云ふして私心なく無所して

私照なし。浩然の氣天地の間にみちくるとき。靜なる時ハ虛
にして明かなり。動ときハ事に應して理に當る。氣血の氣ならぬ
なる所を説ぬ。其氣象を見るに。篤恭にして天下平の道

集義外書巻七終

集義外書巻八

脱論五

一心友問。養生ハ大事に當ては不足。死をおそれてあるに當る
とりても。葬をおろそかにし。喪に居ハ。君子の大儀なり。是心ハ粗
見乃大節なるハ。其のもちへられ。うすきのミにて終るを。何そ
帝堯ハ許由の如し。光武ハ子陵をしたひて。大事をたのミにせ
ぬをし給ふや　云。答。養生ハ親目前にあれハ。人ある者髪毅を
保ちていつまても。死をおそれ傷ることの後ハ。親不在。今の義を尽
との義にあらされハ。大事をそのひまてあれ。今乃人情
すくなく。義すくれきりて。形褥まりて。氣力衰へし。此世る
ありしこれなき又る事。時勢位に不附の格法を承くさを八。
義いよいよすく廃れし。かくのことき乃説を用ひ時を不知哉。

文泉堂

太事に當るべきや。今の徳を情といふ家人ハ。多くハ名聞をなさんとするハ利害のことあまりても。察されぬ名聞ハ識なく。利害ハ義なし。識なく義なれバ。其實を不知して。喪の礼法を行ふを見んて死をおそれて。大事ハ當るを恐れて。大なるおやまち也。名利なくして情あつく。其性の識より。徳を情じ人あらバ。何ぞあやまき。今の世乃君子たる人ハ。足らしとても貧乏なりとも。貧窮義ハ其一つのことなるものなり。孟宗の至孝たりとも。孝子と云べきならず。賢人君子といふ人も。是ハ國家天下に用ゆるハ當る人なれバ。今のたるは當べき人ハなかるべし。義理あつく利害にとらず。喜美をも好く。名聞をうれへ。仁愛あつて勇気ある也。かくのごとき人にして。父母先祖より得たる數百年の藏をもて。智來る情なり。其上時の運よろしく。氣術よし。

上世の格法よハ叶ひ難し。格法よ拘りさるハ一家を保ち。大徳を備へこそや。或ハ分限の礼よ従ふもつひ法とならぬ賢しく。或ハ名聞深く。格法を守ふ事を信じて。大事を誤る世ハ。乱の本なり。古乃人ハ。情あつく氣術深く。故よ欲うすく。識ありき人ハ。喪を行ふ事易し。識うすく欲あつきものハ。行ふ事不能。故よ時云あり。古今人情時變に同じからざる也

一 鳶飛魚躍の章と同 云道ハ見るべきもの見るべきものハ性情と。風雷雨露の時を。飛潜動植の意をあらはれ是なり。学術格言ハ動る時ハ生としてやまれ。便是変化乃門なりといへり。其上下のよハ居をさして云ふ。下ハ黒なり形を顕く見る時ハ。鳶ハ淵よ入る事不能。魚ハ天よのぼる事不叶。是天地の大なることいふも不可尽

なり。道をしらざる時ハ。亜も天子より諸侯も乱に至へ
し。夫婦の愚も。其身に知べき所也。亦理を知るに明道活発
の地なり。大徳をうけくこれを得る所より
一心友問。君を治の法。飢ある時ハこれを富しめ。富る時は是
を教ことを得り。今時をそれ飢あまりて。民ハ衣食なく
此士ハ貧困之ば。故に士ハ。ひさかつて民ハ盗をも教べき事あ
さりと。今此時。士を富しめ。民を足しめんとすいかにする
政かあるべしや。云財用の源を弁へ。是を入るを計
出るを知る是にあらば。何も財乃源を開と云。農ハ
利あらん時ハ。あまたにしむるもの多也。民力余あまるハ。五穀
を生するを得りなし。女工ゆるやかに精されて。天下
乃婦人よく女工を勤めて。布綿絹あり。木をかける松人乃。

口に入をしつらへ時をたくらひ人をさまる時ハ。草木蕃し。其用材作
をそれハ。其用乃足用にをさまる時ハ。山木茂り。川沢く漁く民
用をなしかるハ。夫金銀珠玉銭物と用ゐる所多して。五穀
をくたすれ時ハ。人民多欲なり。其人とあらそふときハして。
善悪をあやまる時ハ。驕奢なり。この故に五穀ハ粟
を以て万の物よりゆる也。今の俗。粟の字をあやまれり。俗に
富ふ物あんれの字ハ粟也。粟の字ハもとの字也。米と見
てハそれ易し。世になりて其字多故に。いまへハもとの
めく納め。万の売買もみそせしなり。みハうさ多て。
沢山に流さくさまねく物たる所に。その流すく人心の欲を
くらし。万の物をもらうくもみよりくく令ともちろも。助と
なおしく会まらめ。故に倹約のきわしくかけきとも。その

はかり矯奢にいつれば。世の中に粟みちて。深山なれん。大
方の凶作にも。困窮に及ぬ。五穀水火のごとく多時ハ民
に不仁の者もなくなりし。盗をなすもまれなし。今頃ハ五穀を
賤くなすゆゑに。すみ流ひやうそ。今頃迄こりて万のうれと
うひとなとはハ。おさめて以て。ひらく事あらし。よきき
やまれて制をもれたところ生れ。諸職のむすをはくさん
るなど取よ商人富よるとく。士まつし。士貧と成り
く民小になるまま流く多し。民もとは士と困窮となる時ハ貴ひ
する所くなりて。多れ商人職人ゆへ及ぬ。あ川まる知ハ
天下に出来ると富人れものになり。同時を以て山
林よ入の政ハ。今もなりまもって不付るも。山林つき。川
沢あさくなるハ。あき事多ろをん人ゆう。　云甚なるかな。

其場出来て後ハ。とこなりろへし。今の場所く時を以て山林よ
入の流とこハ。天下まてく雖然に及べし。今日の食にハや
くさせきおし。頃のさく人多れよの多し。今なすくいよるか
民ハ。何そてら林多れ内よ何年春夏の薪と伐なくへき
や。薪材木をこりて。米よく人甚見ぐに妻子と云はよの
能もあら。今も自然に立山あるく。草木と伐すと制禁
するも。当ま本る杜ハ伐せされとも。更に朝夕の薪もなく
もみきれくいつもなし。今明日の食をるも云ふしきし
のよし何として薪をうひくて。へきや何る前とさてられ
まても。とる八ぬるすまでなるつら。かくる時に山林の制
禁ぬ後くハ。罪人流なく出来あへし。武士町人ともに薪に
よく不自由するく。朝夕のなかりとある数るもある

し。何程よくおこなふとも。聖人の法にても。時節によりあはざる
ことはあるべし。山川までもなく。人倫ことに此迷惑に及べし
同じく其米高き事なく。迷惑する事の多し。左程にあらざれ
仕置よろしきまさんか　云米銭に事足るにあらず。はた貴人
仕官する者にまで及ぶべし。いかにとなれば。今大名小名も
小武士たるまでも。俸禄みなあさる物ハ。まづ米なれば其米の
高ければ。あまたある銀を。其ある上に加へてくれなば。一俵の利をも
あさるべし。年貢の米を出して。衣食にかへる。
年々とぼしきは。いかにとぼしきものなるべし。公役といふあり
もハ其損をもうけれども。かくにもせんかたなければ。
武士たらん者。人ハ民によりてさるべきあるなし。公役とて
少しも其の不足なることハ。常にもすゝむ事ならず。

若民ハ天下のもとなり。其本困窮きはまらバ乱にも及ぶべし。
商人出家等ハ安楽に稼ぎなきも扶へられ。又甚ある者も
ても世中立べければ。それ是のミ上下を伝ゆゑ。
商の失利やむべし。されど失利やめ使役にはあらで。天
下の備損なく高ずる事なり。はしめて後。武士を徳くへ
なく民ほどに工商利をもうる路たゆべし　尚其段ハ
いかやうなるにてもかはり得ぬや　云事にて古今の理を
いかゞ計は商の路ハ知べけれど。其徳を知るとも。其理
なれどのハいふべきにもあらず　次

一 学士ありて云。下にて物を多くするハ上の達にする事なり
其の道なり。然も国の費。天下乱する事にかけとハいふ。
上乃物を殺して。下をふきつゝとも。並てもいはゞ。国家天下

長久なる故なり。今侯卿太夫士。儒者なくして徒に民困窮
をおふハ根の根なり。おきいますかくハ必変さんとしれとも以て
変せされハ。天下よりも運を以て。愛をおす。古との書なり。
こゝろにハ上乃米穀を散して。民をふきいさんとも終に。
民多して穀不足。今紙をおくこさんとするハ。今紙頒て
有く。民のきらひにもとりてふくへきに別なし　云下を換と
ふかれハ奢過とこて徳とハ用をくおし。用をくなやれハ。との流
りて民よおすうそ。故よ云。二簋可用享こそ礼祭祀よ
礼の大なる事也。祭るに二簋を用て。享祀とらるとの八文是
易。礼乃倹なりて微穀のこなわり。後乃すれ倹約人
し。これ何そこゝみすて下とにきりし。数を以てこゝ下にこ
はかれ石なり　同く年ハ人の上よる人と。倹約を表し候

へとも。士の臭食いのくきハすり。民なるをく困窮とらるらハ
何そや　云人心の奢やま侈とハ也。心の奢はやめとして
を倹ょせんとするはハ。奢よ滅して所にいまさんとす。滅まを除
制よハ。人而まを忘く。庶人職を出す。いままる所よハ人多
き物を求め。民を於き換く。ますおかしく。故よ士いよく臭食
反し。民並移民とかれも。儒奢乃風俗おわれく。大身小
身ぶれ身まされ。何を以て。事をめくまんやそもひ今の民よ
年貢をとるをくして。おてこれとも。民のみさおひとも成へう
らとその故ハ。教なれハよりもく。士ハ富く。いよくとる
て知れ不仁なる民ハ淋臭なりのおきるひとを如く。一
年れ妻子の書とも。二度よもるしくもて。これ寛民なる不救よ
けしくも　同天下長久の第一なる。倹の法もはよわり候。

行をなくし今の世の政しきんや　云士君子なる人にても
其附ハ仁を好く人民を愛すとも仁あまれハ無欲なり。無欲
なれハ自然に倹なり仁愛ハ無欲より出る倹なりてハ
よく下の為になれハ法に出る附ハ必害あり不出するハなと
まり　同上なる人仁に無欲の徳あり倹約の法を示し
給へとも人民の為よかしさるもんハ何そや　云民学の教
あまねからされハ人をさしいれハ人の心服せさるハ是あまた
とも倹素の政をとるに不足出す付吝嗇なるもの
ハ倹約を好みてよろしくいましくいやしとされるもの
此とるんて倹約ハ吝なりとあるもんよハそうしてや
みて実ハ其さうハさる所よりといへ給に約りまさ保とて
なれなり

一舊友問世に貝頼負たるものさいかするに大切なる人ならすとハひいきを過
てよ不叶儀之されともすれハ其人の害となるとなる者ハ貝頼負のあたる
物なるや　云世の小貝頼負としさいふ人者の甚しきものそとたかれ想して貝
負して人をひいき者ハ自ら得し共貝負をせんとおもへハ其人のためなる。
ものつるにやくきるを家小愚なる道を好人何も人愚ろいふ人不ハ其自
然をよいる子及を捨し心術を自反せしめて聖人の名成つる事に登ら
しむ階梯乃一級とさんを守その意とりを甚と及ひとく其教をとりあ
ハ世にへい始終の情をよく人きハ孝経四書にありて臣たるもの人の思ひ和解乃
書状作てありたる貝頼負して他の者にもそれにまかして夜ハには。
愚なる者ハおもしろ是をもちめる人おほく其人自己の意を解て一人
從するおもしろ自己の教を抄さあて獨知を持しとおもしろ見して安し
我なりしせうとする者の貝負ととも保なる是人のをあわれみなる

然ハ愚か学術世に拘なく何の益かあらん道ハ聖人の大道なる故に全く
て一乃流を結ひ一の争端を立て是として天下の衆人をまとはる良
負ハ然し是れ何の為なるハあらし若愚か本心を貞負をとハ愚か書を精
して思ふところを其趣ほと人あらハ解て惑ハやむべし愚か説をいれ
ゐる甚放心を引きむへき人あらハ散て其人にあらハ座むべし其人の説
ひとる然ば何ほせハ孝愚か説を重てへ聖経よりも流れ来志をん世中
ハ悪かんのて説あらんハ是が本心也説ひてこれなるべからし悪か本
心を悦びめてそて貞負とられ実おもあ悪か本心と憂しめて貞
負し扨らんハ毒悪れ肉をなし歓ともにめてこしそれ果下に及の
あられて並有べきものハ孝子忠臣貞女友弟士実の人也徳大
なる人あれハ聖人れ業也聖人れ常なるへしをて別に道をそそ
教をなして人をさとすかハ然るものハわらし愚か浅学のさにあらと古乃

大儒と云まさる朱学者れ貞負なを説とのハ晦菴を然し王学者れ心
いまゐさるものハ陽明を然て朱子王子れ名をこのむ乃中人にあら
と徳をもちいれ君子たらんと附の弊を除そて聖人の名をぬすみんと思ふ。
志ある人ハ朱学者ひらく一流とし王学者ひらく一流とす。その学者れ
ハ徳を好まず業をなさず然して闘争の争論あって聖学起りし朱
王の本心ハ聖人の名をあらはさんとする志しあて聖人乃道を
塞く也朱学者れ志は然るべて朱王を信じるハ貞負なほしゐ
あるもの若孟子の本心にかなひて孟子然ひるハ古今聖経を誦し
て人をして文義に取入しむるハ朱子に至ってハ飛しそれより後ハ浅学
れ力にも及ひらん聖語を得ハ也し聖経とひとも我心の涯なり。
然ば得くして文武の二道を無くて動をあらし且学者乃魚を。
闕をぬけるハ孟子に言くハ然心を向るも手て聖経を見落を知る。

る理を且従ふ者凡物の外我ものゝくるゝ所多く王子凡聖学は益あ
正く代る学は先祖の遺風にて武凡業なることをしてきるもの後と陽明によ
りて学ぶ文武凡継業をなすことと知べし此二の益を明らかにせんで二子凡学を先に
聖学は勝るすなわちとも凡まもりいなし廣国終しては害も大なり天下乃
学は執せさる事なれば事には弊生ずるよりの道統を先二子凡本意を学に
其のは益ありて而て弊生ずるなし　因聖人に至るに聖人は法とする所の
くそれは学にて凡と名を明らかにせしとは此に來りも各人の學以て　云ふる志は
らくおいに力を従はざらんわよいて來りてよく学ぶ乃ちあらまほしと
此く後多く学従ひてわずかには経伝よりく経を解て聖人
乃徳を全り通とんと聖人の徳には倉蓋乃味ひ窮かし世
より聖人に對してまんまうること見るなく名を明らく後いつよく
親切なることどもかわえあるべし

一心友同興滅国継絶世之章　蒼云。民に功徳ある人乃子
孫おとろへて国を失ひたる、其封して祭祀をたゝしめ子
孫なきは其同姓をえらびて祭を奉せしむ。徳ありて
うしなひたる者を擧用る時は、ゆへある也。是皆天下の人心の帰
するところなり。いはんや農と無となるものをもてあらざる時にはめぐみいふ
ひや後世無農をなげきてよりは国を亡し世継絶す。
天下の大患事二あり。其一は君一人は亡ぶべき罪ありて天。
其家中流浪人と成て、住所に離散して家内妻子共
に数千数万人に及ぶ。飢饉の手にかゝりて死をも
其歎き天地神明を感激して其二にて風俗ありて
多かり。畢竟罪一人によりておほく其人あしく。国郡の其
罪なしといへども子孫かけては同姓に及ぼして亡ぶ。

是又家中の勘数ハ同し。或同国郡の其主ハ。又正立
乃国郡なきまゝ。牢人を扶持するにあらすや　云
右抱なしといへとも。十か一をも不足。千人乃牢人百人なほ
附ハ此のとも育付るやうにハいへとも。立身の大身。其家代若
代の志願これ立身を。百石ハ一二千石なまなり。千石ゟ
七八千石まても成。切米取ハ五百石三百石まて。歩士ハ中小
性。或ハ小身乃よふ中ろ成ちも歩士となる。家内乃もも
うしと心ねとハ。是非年のとつても多し。此外續しきもの
ゆへ。是立身をなれ。士乃風俗あしく。やしき志つさ流行
ぞ。是天下の風俗乃みたる事第一なり。なれの属くハ。
落ちもく續男織女ともぬ。家かぬ西作るまゝハ。續事
まへ存ずるあさりとも。流ハ牢人乃果とも見えて。丸腰破

主の夜も同じく。衣食まで同じ。飢饉の度ごとに数万の餓死ある
ハ。是まけ牢人の果なり　同じく身の大名なりても国々
毎牢人を抱られしにあらずや　云ふもの続家のなく
なる牢人ゝりゑらるゝといへども。家中ゟ年々に牢人を
添へ抱るゝも多し　同あききものハ改易し。扶
持をなさぬものを召抱へしとも牢人ハ背くさる。又大
名をもそちして不許ある家中不便とそひなかりしと。
牢人をよく扶持する類　云ひめいとも左遷の法有て。
改易なし。大身ハ其名まれ。其身一人罪して子孫を
立置くべきの生れなる人を遷して数代せしめたり。
同しくよて改易とやめ左遷を流きハ流かくとも絶き将
あるまむ　云左遷ハ他人流りてもそれあるれ。俗を行へし

禄を減して下し給ふなり。郡の老中ハ其国の代官也と
なり。其役の属ハ代官下代し成さくるなれ遠
とし入ても其流の罪ハ其まゝなり。大悪人ハすて置ハ悪く
ハ国人の害となるものなれバ。八条嶋鬼界嶋又ハ朝鮮琉
球なとへ流かハさ殺しも流しもして。同属くの武士
かさやうにありける役人となりてハ殿ハ追ますとか云
こゝ下々ハてくれ其様武なれハ。不届ものゝ也　同国郡の主子
孫ハ同姓にて跡乃立へきものなき時ハいへ云に
ハ其家中の続き武動さん小身のものにも才智あらハ是
国郡を治へき人を撰ひて君とも君と成人一人おくく
其家来を家来としもて。扨流浪人とつくものなし国
に於て一家性を絶く家人のゆく方なきは又其国

一心友問。当世学者の儒者といふものハ大なる悪事なといふ
事ハとハそ其ち其北家家内のものとも流浪
させんを不得役なるゝ也。先にそも世中の人学問とき
らへるかりの多し。聖人の法といへとも身におゐて志のひさる
か如し　答云。大君の国郡を封し給ふも同し理也。一人と
して国郡を治めし。国郡をわけ一人におさへ身分とも
しゆしるにあるハれ。先大君の其国に其ひ置るものハ一
人として退去てとあらす。国にもとれとも元のゝく
治者ハ其郡のものに任なり。国郡を預け置ハおのれか
生代かりさるかなり。今家にも又其国を子孫おもし
て替へるハ。祖先をも身多きものゝいまた家ふくを
役者をつとむへきものを撰し。佳禄をあたへ。其家内の

男女をやしなはしむべし。法度と成て王室の後孫とうく
れん。王室の老後を養ふべし。王室同姓なりとも祭
祀をはくべし。他姓なりは継し同姓を求め我後の役たんと
きん。同姓王無くば我ちかしと家事をみぞさる
ならざることをしるべし。源平藤橘等の姓はひろし。蓋し
くまづは同姓のなきにおいて同姓を妻とするは古
の法なり。周人の百世といへども婚姻不通の法は同姓の
親しきをひろくし人の後をたすくべしといへども同姓は同姓を立すべくは
他姓といへども可也。人は皆王化の孫なり。同姓にあらざる
はなし。まかりくる者なりと人倫を乱るなし。礼を守る
て貪欲をさることをうとしめんとなり。君上大君とあるは
君子の義なり。小人纔なるは小人のうる也。小人は小君と称て。

貪欲はきらふ。君子は大君とまつく小人は下るなり。故は小人なれ
人情風俗をおもんじ儀かりて人情を専らにするときは大君と
けをなれば聖人も三年にして成てと。おもはん世にして仁あらん
との玉へり。君子入籍等は今日本の風俗とかくく人情の
安きる事なり。君子たるものは人の非をそしらずて天を以て
ひとり立べし。天下の風俗と替るとは下においても修めよ
わが身をまもり明君上に出まし儀法を立ちふべく
を徳化のひろまるをまちて術をしくるものかなる人
し。同子路孔子の命によって射をとるものを退き
まし。然ども人の後となるものを恥しめとまではあまりに云
これ聖賢の志なるべし。孟子云。仲尼は甚しき事をせ
ざる人なりと。我理は我理をして大過そ人にも聊學

をおこなはしむる不仁なるをもて、今日本にはこれなし。
又兩家のことはいはんや孔門にとほざかるをや。富貴ハ
後人乃附會なり。これにあらず。もとより信ずへからず。当世の儒者
とかく学者ハ人情の勝心ともおもねりまし、利欲の根ふかき
ゆゑにこそ不仁をもて力量に伴ひ、古人の跡をみんとす
変通をしらずして、嫡子にハ礼法をもちゐず、文弱にふかくは申風
とせし。常人の君子の大義とおもふたるもとりもせんや。凡
女子も貞女の二夫にまみえずといへり。今も虎の皮をときもる紙
にても尾をおさへんとせば、是もまたちかひ、かつ是よりちりときには
あらずと。共に罪人になりそふ虎の皮あつとも、革の皮と
なりて、群をなしてうつれたるを、ひさしく年月をへてまもり
用ゆべし。是をきけはなにとなく、是に逃けまいる恥なる

こころありて君子の学ハ忠信を主とし、文ハ附に中とへし

一 朋友問云、江戸の学によれハ、程朱の説をそしりはなはたしきことを
そしり儒者とよぶ小見識の人へるハ如何なる事ぞ　答云、ち益
ハなきことも弊をみるありて、経傳をも離れて、その大意
をとりらく。管見と是らし、家見をまもりて、ちいさく師法をまもるは是
人をそこなひて、未出世ねて、河南ハ世に比弊とさしもの世の乃
学者の見識さらに傳らるゝことをもよしとせす、つまり繼を好む人のまよひなり。
粗学の自満はなはだハ一二にあらず

一 学友問、格物致知の説ハ、古昔の経にもなく、孔聖乃語
にもあらず。傳ハ子思孟子の鑿明して傳ひたるか　答云、易
乃六十四卦をはじめて、格致の説あるにあらず、つまる所
し。易簡明白にして、通へき様に、鑿をかけ出す語

ひとつとしハ、堯の舜に伝へ玉ふ執中の心法なり。孔子の顔子
に伝へ玉ふ非礼視聴言動するなかれとのたまひし格物
致知の修なり。曾子の一貫を忠恕とやはらげ玉ひし。子
思又孔曾の伝れ心を述て経一章とし、後に附格物致知
といへり。同視聴言動をもつて肝要の思術談し給ふこ
とはいへり。蓋天下ハしかれバ土用をいれて元亨利貞
ともなく、誠をいれずして仁義礼智ともなく、信とやぶれ四り
通りてなすれバ、されバいれずして中庸にあり。視聴言
動の四つのもの、思をまことをもつていふことを存じ、まず顔子の
ハ思の格ハ不用にてあり。中人以下の学ハ善悪をなひ、善
と行く悪をさなひ、悪をなさぬやうにあたる心思躬行天
に善のくつとく。悪たまたま善人とハ、元信をたてるハ初也

是より信義大聖神にまさりし人なし。顔子ハまさに大人也。
悪念乃是非に併来せざるのミならず、善念もまた併来せ
ず。何の思の格あらんや。されバこそ三月仁にたがハざるの徳
あり。其後歩ハ三月にして、相易ふるの心あれバ、三月
といへど一年中の事也。年月日時をつくし、終に仁にかなふ
ことなし。顔子とても三月違へバとかくものハ、強ならず精
の事。善念のきざしあらバ、ありのまゝにまかせてきたる
まゝなく。寂然不動にして感じて通ずる。聖人の心術にハ
をよばず。およそハさやうの背きも、まだそれも一時の浮雲の
太虚をさふるごとくにて、平人にありてハ、筆にしがたき程
の善なれども、顔子に至りてハ、少の傷にあたるなり。
其善念を須臾もとゞめず、さとりて復する也

問ふ。これ此説なしハ。視聴言動の未發るときを喜怒未發とは
いはく　蕃熙子高明廣大を好むにおゐてハ聖人なり
同し。今さら喜怒未發をいふへきにあらず。平人より聖人に至る
ものハ。未發と静時に気あり。未のしかハ心をもつてそのこ
ころあるゆゑなり。仁ハ天地万物をもつて一体とす。故を
つきものなし。これによりて未だ知喜怒へきを蕃熙子
流水の備をとつて。轄晃等をもつて人にはなをしたる知
へし　同先生の備ハ陽明子の説に似たり朱子王
子。格致におゐてハ黒白のちかひ有てハいふく　蕃
黒ハ朱子にもちかひて陽明子にもちかひて古の聖人に
とりて用ひ給ふ也。道統の傳れより來りて朱王とし
に同し。其言ハ時により同し蕃熙子かくへし。ことさらにあ

をつくハ矯節と合せて隔りてし。又朱王とてとも各別にあ
らすと。朱子ハ時の弊を守むへきゆへに理を究め惑を辨
なれとも重し自反慎獨の功なきにあらず。王子も時の弊に
よりて自反慎獨乃功を主とし。究理の学なきにあらず。愚按自
反慎獨の功ハ内に向く。要用となる所ハ陽明の良知乃發
起に疑惑を辨ふる事ハ朱子窮理の学によりて得り。朱王
の世学をかれのまよひ異なる地をさへとも同しかるへし。究理と
て事々物々の理を。空にいひとくハ人のまよひあり。心をなく
学の心乃なきまよひありて事々物々にあつて理を究
めたり。されと是ハ神学の時乃ある也。大意なるに知ることれ
といふまくこれ辨不知の地。千万の事物におゐて本源といふ人也。
まよふへきてなし。異学乃一代なるとなると悟といふもの

ハ聖学にそむくハあらねども。念ても労をいとひて枉
ひがことゝなり
一或問。もろもの俗事を知ぐわしる人ハよくしれり。不知しく
さし執人ハ多し。聖人の道を学ふハ。名を求ぬるにハあるべき
までし。今名の欲ふかきものや。かゝる俗まなびのまくそれしらるこ
とハ何ぞや　答云。人乃知ぐるハ我を労とするなり。しかれバ
我を安とするなり。我病ふかくて俗事を労しんとするまゝに
ひろくし。安とするもあらず。故ハそのうへハ我をとかすくに
なり知ぐわしるといふも。思ふに徳ありて甚くしまゝに
と。氣象のあひるあひる人あらん。万人に一人の知人あらん。
我を労とするに甚し。其俗人ハ我よりも深く。我病氣
をしり俗なり。至それハ俗のまゝ乃人に分ありまるなん。今

俗くなるへてもあらし。且徳をもそこれハまんぞ。そしてハ
思ひを欲格し。浮華をつぎ身ハ生涯をおさしるや。さて
是非いでも知ぐるハ思ふる欲まし。浮華を生し。氣力を
つかさしきらんことを務るゆへ。問ひまハさよわき。ちぎ
の名をとりて不苦を取り。且世事によおかせず。事多しかれハ
ようきる悪名をとりて終ふてハ。名徳の疵ともなるべきこ
云ぬ志うねる悪名をおほせまて。名付けるさるハ無実の誰
謗也。其人をころハ。をそれあるも聖人を先に帰ゐり
まことに大徳乃人ハ。誰も大事にてみるまでしとなる
なり。思ふてもれ不徳の色なし。よろしき悪名なくて疵の誰
あるか。むかし元人の不欲まなりまさる故に。それよりも
そしとりてても我をまたなれてもおほハいかにてもあ川

うく後
一学友問儒佛乃辯よ就く。仏学にくりかゝさる故よ彼ま
仏をも不知といふへきや。吾尓を明さんかためよ。余これん。仏をも学すふ
へしや　云彼も争りんか為よ学ひて非なりとし。上儒仏
乃辯を好むハ。為とうろとし太甚しさる故なり。江漢以濯
之秋陽以暴之皜々乎不可尚と以へし。玉の光ハ為るてと
為りとも。石似くも乱る人ハ後とも以へし。學とい仏学
もとふるす。仏も不倫なるとも。彼を非とせハ彼佛を不知と
いはん。彼仏を知といはく則吾学仏為好かん。仏もに儒学
ひらく為なる為あまりとも。為尓よあるされハ色を見るて
とんりうはして。理をとらんるすあもしと儒も仏学とて
也ことも又用しる人へし。自己に滋とりとハ可也。人よ云く

色うくは。我仏学せされとも。形容乃跡をみて色を志ま
ひとあるう吾子のさわよこれをいらん。仏学流多しとい
へとも。天台と禅とをとくれる。天台ハ高妙なり。仏学乃
くりきこと禅よ儒されしも。志るまても仏よ或あり。禅ハ学
あるけまとも。ちらく仏法よ本付く要を好ちり。然なれか
てくる。是れ其実ハすまへし　問すよ。示ハいらん。云仏氏
乃学ハ死を畏るくによれり。故よ是と云くやすまとて。禅さ
とれりといへとも。死を畏るゝより悟を求む。聖学の徒
死生ハ昼夜とす。常よ死を畏るへき事なし。故よ死
をいれと　問形跡いゝへきや　云仏迹ハ形と親と
れとくまり仏へりは。佛氏剃髪人倫を棄は。ハ倫理と
あそ満とはたり。天道倫理なし。志る然倫理といへ其ハ

まよへるもいりし異物を見んとするといふ事のあり。これ眼病なり。
其後見んとする事のなけれども。能く知りてハ眼病を治する也。
白石狐家とてかくあるけものとし。筆さえあるなるハ此治
なり。真惑にて狐狸の業とも見えもありし。釈迦偏曲とみ
さるハ心眼病なり。後世の仏者いけ仏病を治して偏曲あり
とおもへり。又白石狐家の狐狸あかるく。主信をまもる事
あり。故に出家してもねがはん事と称へり。まま実にも仏の
出家より偏曲なき理をしらバ。一日も出家に任せんとへかく
らく深く儒学して偏曲にまとハさる境もあるとも以て
とも。或ハ後世のため。或ハ主も家代名聞なとにかゝハりて学
ありとて。なけれバ。仏家にもまた仏もありと見てくより
一学者問。仏学をこころてよりて。儒学実学にかゝはるき。諸儒

思ひ入かがりきり。さて儒の事なくして近年禅学の事盛なり。よりて
くどくも。仏学に目をさまし。故やうやく盛なる故なり。さて儒
学ハ日々におとろへ。禅学ハいよいよひろまりゆけり。其かはりに
心学ハ禅のさかりたるけとなれり。是れ憲なしとぞ。おもへる
ものありといふ。　云ふるおなじなり。ひとへに世ハ流弟に文明に
なりたり。唐におゐても初ハ儒流よりおこり。ひろまりけるに。後に
ハ流弟におとろへて。禅学の事おこれり。日本も後ハさや
に成ゆかんすまじ人ハ易簡なるすなはち易し。一宗
ありて易簡なる立法なけれバ。これに帰する事の多し。
浄土日蓮も後ハ一向の易簡におもむく。ひろく成ぬるを
以て文明にいたりて。地獄極楽の説を信ずる事う
すし。是より後ハいよいよさかゆべし。禅宗ハむしろつきぬべ

なし易簡に教くちうと悟りをとくさのゝ後生れ地獄
ふくりれハこれ文明の世におへ今乃禅ハ愚丈愚婦
のようくると欲して妙をいふも利なり祖師の徒来
よそむきりこのをすそくハいよく道にたかふて他宗ハ皆
とされつべし　問　ひそもの学ぶぞかりなくして人の志り
意ハ経ハ今ハ天下にひろまり行んにかけうしきるも也
云たりくれハとかく大小成ものハ黒囲なりと儀によひろま
行ものハ長久なれハ民九十月よ義をまもらくぞつふ
生をれバ甚だきよとさへらまじ。曽かおよう川ままじこれよ
よりて根をふかくされバ甚気よ去し卯月の日に実
をむくとひくあき熟とるものぞ花ちるもとさへあるハ義
れ生を宰嘉かれし　後世をこゝろすめんためし甚徳

なれバそれと知るかなり達磨乃仏心宗世にひろまりて絶
ふくさて毒害をうけしも。ことも死して后ハ後世ひとり道
なり異学ともいへども使あまじハなり
一心友　問　儒道おこらバ仏法ハおとろへ侍らんか　云后を興
さん人ハ君子なり人君子ハ力をおく物乃興廃をなさん
なれバ利欲おこらバ仏法もしかしにへりよく成ずし
けりしきるすハ経来無なりて道なれバ至乃余塗の程
ぬくすなりもく大字もよべきうらとも取くぬく又ひとし
なるべし乱世乃ものひハいて命しまるす多かるべし。志のまゝた
法ハいまよりハよろるべし　問　儒法にハ年に一度忌日
乃精進あり。毎月精進といふすハ仏法より出ずるにや
云　仏法なりとなハなれバなりといへどもとしいハ出家乃絶

法よかゝはらずに。常にたまるものゝごとく成て。年に一度の
精進まで。僧のいふに不任なり。後世ハ仏法後世によるなりて。
法なくては戒せらるゝ。雖然なれども常に法をとめなく。忌日
不来たれ。釈迦の為に作たる。毎月ありし出来るゝ人しぬと
といひくらくなりたるとの事。ことに死たる時の月日こそ。
父母の喪有べけれ。ことに附そと云も忌日に毎月精進をし
き理なし。故に君子ハ不用。去りながら参拝せざる人ハ。
俗に志ろうことを可なり　問一年に一度ハあからそうるか
つれといふなりのありいはん　云忌日ハ父母の喪ゆえ。親
死したる時月の忌日ハ。終に在るべからく忌て可なり。喪時
乃祭ハ吉礼なり。孝子の心に親を死たりとせずといふ時
りそ祭ならて。志るしハ神としてまつることハ。潔斎して親身

そうじ神明にまゐる道理なり。神ハ志ろくきよくけがれをいむ
あまりハ。ぼしかしハ潔斎して祭るすハ。春秋と忌日と二度也。
後世に附に如く五度と成れり。二季の外に忌日朔望の辞ハ後
て不祭とて。潔斎ハ志がくしりなる附。釈の示へ礼に従て同じ。
或ハ君の後との或ハ古来の坪地或ハ神との合を徳へ他
行れしは母をひ悼く又害に依て従ふハ子の心へ比方にて
数なるべし。年に一度の忌日の外ハ吉礼なり。凡神祭
の義なり。毎月忌日に飲を謹みてもよきかなもひ申しいつまでも神
祭をはるぞにんとし礼にあらぬ。故に君子ハ不用也。然りハ
次のおりの礼を除くし死たるやうにてもとのたるゝ礼を以たる儀
なり。上古ハ年に一度の忌日乃祭をなかりしとみえたり。
三年の喪の中なり。過礼にして喪服除てハ古をまつる吉礼の

非人なれども忌日の祭ハなすべき理なり。後世孝子の厚情より
出たる事にて一年に一度の月日ハ親の死去せられし日なれバ
終身の喪の気なれバ。せめてハなすべき義をおこして給
しかるにさく紳士なすべし。今時続きをおもひ忌日と
色み常備ハ不理なる事也　問曰毎月出家にお経の
流行す論ずるは何ぞや　答曰ハ出家を勢く張る者也。
家よりの害は洩してハ何とも多くべきや

一心友問今の武士のよふなるハ。弓馬兵法をまなびいれり。豈
無これよかり寄まり武芸も世中の用に立ことなし。
るりある紀乃なりけりといふものゝ無益なり。兵器ハ無器なり。
立るまいハ武士を遊民なるとや　答曰常ハ小忠にて全
御名しく異国よりの攻むときかるものも武忠ゆへにせるを。

武士の武芸をまなぶハ。国の警固なれバ遊民とハ
いひがたし。武士なりとも武芸の事をすれバ遊民
なるべし　問吉利支丹ある事も異国の教を弘せき
のふかく事なり。弓刀も用ひす。人をなをさるゝ
き謀と申侍るハ。いかゞなるべし　答志ありし者を外
邪なれバ治し易し。吉利支丹ハ内病なれバ治しがたし。
此内病の生ずる根本ハ。人心の乱より起る。庶人の困窮
よりおこり迷ふ。困窮やまば根を絶べし。法の後生
のまとめあるゆゑにてそれより彼さる法を作りくらひ
くなれバ。後世のまとめハ吉利支丹のより起る。中頃ハ
制禁なけれども。もじるとあさりとも。豊臣乃命にて
とまりひなく。又農兵として民の困窮もつよかりしハ也。

同志のうちハ日本にも儒者ひろくありしハ。吉利支丹なる
ひんの云たる理にて待ぬれとも。今の儒者よハ儒家
なりし名を見たるを立てくいひかられ頓なからいつまでの儒
学を以ば国の形をよあひかくて。今の滅よ叶ふべし

集義外書巻八終